

大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究ー 2010年度就職合宿を実施してー

著者	肥田 幸子, 澤田 節子
雑誌名	東邦学誌
巻	40
号	1
ページ	153-168
発行年	2011-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000243/

大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究 —2010年度就職合宿を実施して—

肥田幸子
澤田節子

目次

- I. 問題と目的
- II. 研究方法
- III. 研究結果
 - 1. 就職合宿の期待と効果
 - 2. 事前と事後における自己効力の変化
 - 3. 事前と事後における記述内容の変化
 - 4. 期待と評価、記述内容の年次比較
- IV. 考察
 - 1. “職業選択における自己効力” から就職合宿の効果
 - 2. 学生の意識からみた就職合宿の期待と効果
 - 3. 前年度の修正点をもとに改善された本年度就職合宿
- V. おわりに

I. 問題と目的

経済状況の悪化を反映し、2010年度以降の大学卒業予定者の就職状況は大きく影響を受けることが懸念されている^[1]。2011年1月に厚生労働省と文部科学省は平成22年度大学卒業予定者の内定率が、過去最低の水準であることを発表した（2009年12月1日現在）^[2]。また、2009年の厚生労働白書では、「若者が主体的に進路を選択する態度・能力を育成することが重要であり、そのためには、学校在学中から職業意識の形成を支援する取り組みが重要である」とし、若者の職業意識の形成に教育機関の関与が重要であることを述べている^[3]。

本学においても、卒業予定者の就職支援、また、大学生のキャリア形成のために数々の取り組みを行っている。そのひとつである就職合宿（事前事後プログラムを含む）は文部科学省より、GP（特色ある大学支援プログラム）を取得しており、本学の就職支援の中核であるといえる。

本研究は就職合宿を自己効力という指標で効果を検証し、具体的な改善点や示唆を得るだけでなく、それを実際の支援に活用したときの効果をみていく継続した検証が目的である。川瀬ら^[4]は「本学キャリア教育プログラムが学生の自己効力感に及ぼす影響」のように自己効力感という指標で、キャリア設計のプログラムを検証した研究はあるが、提案した効果を検証しなが

ら改善を加えていくという縦断的研究はみかけられない。

2010年に行われた就職合宿は、2009年に引き続き2回目の実施である。(第1回、第2回就職合宿プログラム概要は資料1、2) 第1回就職合宿では、社会スキルテストKiss-18^[5]を使って、効果の検証と記述内容の分析を行った。その結果、社会スキルテストからは問題解決能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力についての上昇がみられ、記述内容の分析からは現状把握や知識の習得に関しては効果があったと考えられた。学部別比較からは、11月28、29日実施の人間学部人間健康学科(以下、H学科とする)と12月5、6日実施の経営学部(以下、R学部とする)で顕著な差が現れた。就職合宿の効果として学生が最も感じていることは、H学科では「課題の認識」であり、R学部では「就活に対するモチベーションの向上」であった。この差は後日実施であったR学部のプログラム修正が起因すると推測された。H学科は模擬面接を1回行い、難しさを実感するという現実を認識した。R学部ではそれを2回に修正することで、ある程度満足のいく状態で終了できたのではないか。この自己に対する有能感が質問紙調査の結果や記述調査の分析結果の学部差となって現れたと考えられる。これらから有能感は学生の積極的な行動を促進するための重要なキー概念であると想定した。

自己に対する有能感が次の行動にどのような影響を与えるかを考えるときBanduraの「自己効力」という概念は有効である。Bandura(1977)はある課題を遂行しようとしたとき、それがうまくできるかどうかの予測を自己効力self-efficacyとよんだ^[6]。さらにBandura(1985)はそれの強いものは、自分の能力が例え限られたものであっても、それをうまく働かせて困難に立ち向かい、さらに努力をする。弱いものは失敗にくじけるが強いものはよりいっそう努力をして成功するまで努力を続けると述べている^[7]。

この「自己効力」を進路領域に取り込んだのはHackett&Betz(1981)であり、その後、Taylor&Betz(1983)によって、進路選択行動と関連づけられた^[8]。浦上^[9]は進路選択に対する自己効力の強いものは、進路選択行動を活発に行い、また努力もする。そのため、その行動は効果的なものになる。一方、自己効力の弱いものは、例えそれが自分の人生の目的を達成するために必要なものと理解していても、進路選択行動を避けてしまうと述べている。

今回の研究では浦上^[10]の作成した進路選択の自己効力、大学生・短大生用を使用し、本学就職合宿における学生の自己効力の変化をみた。就職合宿が学生の自己効力に与える影響を知るとは、学生に対する、今後の進路支援に有効であると考ええる。そこで、今回は①職業選択における自己効力という指標を使って、就職合宿の効果を検証すること。②次の行動につながる大学生の就職に関する意識を探る。③第1回の結果がどのように生かされたかの3点について、明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査時期

調査は2010年10月～12月、就職合宿実施時に行った。

2. 調査対象

H学科3年生89人中65名(73%)、R学部3年生154人中45名(55.2%)、計150名。

3. 調査方法

就職合宿会場内において、①プログラム開始前に質問紙(資料3)を配布し記入を求めた。以後これを事前調査と呼ぶ。②プログラムのすべてが終了後に質問紙を配布し記入を求めた。以後これを事後調査と呼ぶ。

4. 調査内容

1) 事前調査で就職合宿に対する期待の度合いを聞いた。回答は「役に立つと思う」「どちらともいえない」「役に立ちそうもない」の3件法で求めた。同様に、事後調査で就職合宿に期待したものが手に入ったかどうかを聞いた。回答は「得られた」「どちらともいえない」「得られなかった」の3件法で求めた。

2) 事前、事後調査ともに、浦上^[10]の作成した進路選択に対する自己効力尺度30項目のうち、大学3年生の就職合宿という環境に不適合なもの5項目をはずし、25項目を使用した。回答は「自信がある」から「自信がない」までの4件法で求めた。

事前、事後の得点間で差の検定を行い、次に因子分析を行った。因子分析は主成分分析、バリマックス回転を行った。最後に、事前、事後の因子間比較を行った。

3) 自由記述調査は、「感じていること、感じたこと」をテーマに、自由記述を求めた。分析方法は以下のように行った。①自由記述されたデータを2人の研究者でくり返し読み、意味内容が把握できないものは無効とした。②生データは一文を一コードとしてコード化した。③各コードを読み取り、類似性・相違性に従ってまとまりを作り、そのまとまりをサブカテゴリーとして命名し、さらにサブカテゴリーを確認した上で、カテゴリーとして抽象化した。

5. 倫理的配慮

学生に調査目的と守秘義務、協力の自由と拒否によって不利益を被らないことを口頭で説明した。質問紙の提出をもって同意を得た。また、調査結果の公表について同様に許可を得た。

Ⅲ. 研究結果

1. 就職合宿の期待と効果

事前調査で就職合宿に何らかの期待を持つ割合は、参加者150名のうち、事前調査有効数は147であり、その結果を図1に示した。事後調査の期待したものが手に入ったかという質問は、有効回答数が149で、結果を図2に示した。

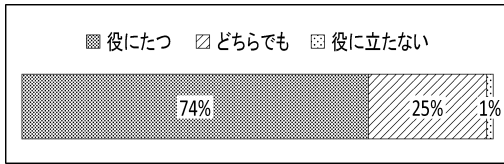


図1. 事前調査、合宿への期待

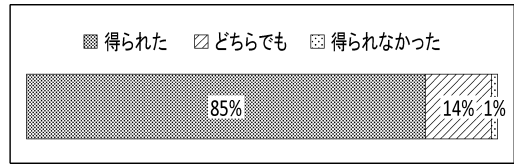


図2. 事後調査、期待したものが得られたか

2. 事前と事後における自己効力の変化

(1) 事前、事後調査の自己効力の項目別変化

就職合宿スタート時の自己効力得点とプログラム終了後の自己効力得点を表1に示した。すべての項目において、事後調査の得点は事前調査を上回る。表2は事前、事後の平均値の有意差を調べるため、平均値の差の検定を行ったものである。質問項目5, 16を除いた全項目において有意 ($p < .01$) に高く変化している。なお、有意に変化しなかった項目は、R学部では質問項目5, 16, 17であり、H学部では5, 6, 8, 9, 15, 16, 17, 22, 23, 24であった。

本調査は合宿という状況のスタート時と終了時のものであり、家族の影響、他の学習、友人からの影響等、他の要素の入らない状況である。よって、この自己効力の変化は就職合宿のプログラムからの影響であると考えられる。

表1. 事前、事後に行った自己効力

項目	事前、平均点	事後、平均点
1	2.33 (.73)	2.87 (.72)
2	2.34 (.72)	2.83 (.77)
3	2.23 (.77)	2.83 (.76)
4	2.39 (.87)	2.76 (.76)
5	2.99 (.74)	3.17 (.70)
6	2.78 (.75)	3.17 (.65)
7	2.43 (.76)	2.89 (.79)
8	2.86 (.91)	3.22 (.83)
9	2.74 (.83)	3.18 (.73)
10	2.35 (.79)	3.03 (.72)
11	2.67 (.74)	3.09 (.72)
12	2.45 (.82)	2.97 (.75)
13	2.57 (.80)	3.07 (.75)
14	2.43 (.86)	2.88 (.77)
15	2.65 (.70)	3.07 (.76)
16	3.05 (.80)	3.17 (.73)
17	2.72 (.83)	2.97 (.78)
18	2.37 (.70)	2.78 (.74)
19	2.55 (.70)	2.95 (.72)
20	2.07 (.90)	2.85 (.83)
21	2.53 (.73)	3.04 (.66)
22	2.64 (.79)	3.01 (.68)
23	2.70 (.70)	3.04 (.72)
24	2.74 (.73)	3.17 (.69)
25	2.62 (.74)	3.09 (.68)

() 内は標準偏差

表2. 事前、事後の自己効力の差の検定

項目	平均値の差	t 値	自由度	有意確率 (両側)
1	0.54	6.475	296	.000 ***
2	0.49	5.683	297	.000 ***
3	0.60	6.772	296	.000 ***
4	0.37	3.929	294	.000 ***
5	0.18	2.163	296	.031 *
6	0.39	4.775	297	.000 ***
7	0.46	5.086	296	.000 ***
8	0.36	3.586	297	.000 ***
9	0.44	4.917	295	.000 ***
10	0.68	7.676	293	.000 ***
11	0.42	4.993	295	.000 ***
12	0.52	5.691	293	.000 ***
13	0.50	5.552	293	.000 ***
14	0.45	4.724	291	.000 ***
15	0.42	4.492	294	.000 ***
16	0.12	1.371	293	.172
17	0.25	2.722	295	.007 **
18	0.41	4.890	295	.000 ***
19	0.40	4.848	294	.000 ***
20	0.78	7.717	293	.000 ***
21	0.51	6.342	294	.000 ***
22	0.38	4.407	296	.000 ***
23	0.34	4.134	296	.000 ***
24	0.43	5.247	296	.000 ***
25	0.48	5.770	295	.000 ***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

(2) 自己効力得点の要素を分析

変化の傾向をみるために参加者149名の自己効力得点の因子分析を行った。主成分分析バリマックス回転後、6つの因子がみいだされた(表3)。ただし、クローンバックの α 係数が表4のとおりであるため、F5とF6は採用しない。

表3. 自己効力の因子分析結果(主成分分析 バリマックス回転)

項 目	I	II	III	IV
第1因子《就職活動をイメージする力》				
3. 5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること。	.663	.161	.172	.095
2. 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること。	.622	.170	.293	.143
14. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業に絞り込むこと。	.617	.108	.247	.201
8. 本当に好きな仕事に進むために、両親と話し合いをすること。	.605	.173	-.146	.184
9. 自分の理想の仕事を思い浮かべること	.603	.026	.210	.510
12. 自分の才能を、最も生かせると思う職業分野を決めること。	.556	.213	-.031	.121
7. 将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること。	.526	.316	.186	.134
10. 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。	.500	.476	.281	.157
第2因子《就職に関する現実的な能力》				
20. 就職時の面接でうまく対処すること。	.306	.721	.172	.023
1. 自分の能力を正確に評価すること	.089	.716	.084	.223
24. 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと。	.189	.517	.198	.414
23. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。	.248	.467	.414	.029
19. 自分の将来設計にあった職業を探すこと。	.374	.396	.305	.337
第3因子《自分の将来を考える力》				
21. 学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること。	.139	.122	.801	.055
18. 今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと。	.270	.263	.560	-.046
22. 将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること。	.202	.358	.534	.220
25. 望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと。	-.101	.259	.475	.251
第4因子《決定する力や確信する力》				
5. 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること。	.309	.183	-.069	.720
6. 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと。	.270	.403	.090	.694
16. 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力に合っていないと感じるものであれば断ること。	.097	-.034	.243	.672

表4. Cronbachの α 係数

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
項目数	8	5	4	3	3	2
α 係数	0.866	0.790	0.732	0.736	0.607	0.514

第1因子は「3. 5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること」「2. 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること」「14. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業に絞り込むこと」等の質問内容であるため“就職活動をイメージする力”と命名する。第2因子は「20. 就職時の面接でうまく対処すること」「1. 自分の能力を正確に評価すること」「24. 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」等の質問内容であるため“就職に関する現実的な能力”と命名する。第3因子は「21. 学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること」「18. 今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと」「22. 将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること」等の質問内容であるため“自分の将来を考える力”と命名す

る。第4因子は「5. 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること」「6. 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと」「16. 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力に合っていないと感じるものであれば断ること」等の質問内容であるため“決定する力や確信する力”と命名する。

(3) 事前、事後における4因子の変化。

因子分析から見いだされた4つの傾向は事前、事後で表5のように変化した。

表5. 因子別平均値の差の検定

	F I				F II				F III				F IV			
	差	t 値	有意確率(両側)		差	t 値	有意確率(両側)		差	t 値	有意確率(両側)		差	t 値	有意確率(両側)	
全体	3.96	7.65	0.000	***	2.58	8.04	0.000	***	1.80	7.25	0.000	***	0.71	3.47	0.001	**
R学部	4.35	6.01	0.000	***	2.54	5.69	0.000	***	1.87	5.49	0.000	***	0.87	3.14	0.002	**
H学科	3.46	4.83	0.000	***	2.63	5.77	0.000	***	1.70	4.70	0.000	***	0.50	1.65	0.102	

全体的にどの因子も高くなっていることが分かる。ただ、第4因子においては有意差も他因子に比べて低く、H学部は有意な変化がみられない。

3. 事前と事後における記述内容の変化

事前の全体の記述数は、86 (57.3%) であり、内訳は、R学部47 (55.3%)、H学科39 (60%) であった。事後の全体の記述数は、123 (82.6%) であり、内訳はR学部78 (91.8%)、H学科45 (69.2%) であった。

記述内容のカテゴリーは、図3のとおりで、事前と事後を左右の矢印で示し、カテゴリー【 】、サブカテゴリー《 》、記述内容のコード (以下コードと略す) < >で表示した。

事前の全体数は、コード数92、「役に立つと思う」が74 (80.4%)、「どちらともいえない」12 (13%)、「役に立ちそうにない」2 (2.2%) となっており、不明なものが4あった。事後の全体数はコード数141であり、「役に立った」は139 (98.6%)、「どちらともいえない」2 (1.4%) 記述不明であった。コードからサブカテゴリーは事前が11、事後は13に集約され、さらにカテゴリーとして事前が4、事後が4に集約された。

(1) 事前の記述内容からみた意識

【A. 就職活動に必要なスキル (39)】では、《1. 面接のノウハウ (11)》のコードをみると、<面接でのマナー>、<面接のコツ>といった面接のテクニク的な内容が多かった。次に《2. 面接のスキルの上達 (16)》は、<うまくなりたい>、<棒読みにならない>、<雰囲気慣れたい>など、面接のスキルの向上を目指している内容であった。

【B. 就職活動への期待 (15)】では、《1. 自己PRの作成 (10)》は、<自己PRや志望動機の実作成>など、就職活動に必要な現実的内容であった。《2. 就職情報の収集 (5)》は、<有利な情報>や<面接がどのようなものかを知りたい>など就職に関する情報収集という内容であった。

【C. 進路選択と自己の道 (20)】では、《1. 自分がしたいことは何か (9)》は、〈自分の適職は何か〉、〈自分ができることは何か〉など、自己をみつめ直す機会にしたいというものであった。《2. 自信をもちたい (4)》は、〈自信がつけたい〉、〈自信をもてるようになれば〉と自信のなさを表現していた。《3. 知識や技術の会得 (7)》は、〈知識を得たい〉、〈どう勉強すればよいか〉など就職に関する内容を教えてほしいというものであった。

次に「どちらともいえない」をみると、【D. 目標に向けて自己理解 (12)】では、《1. 自分の強み・弱みを知る (4)》は、〈自分の長所・強みを知る〉、〈もろさを知る〉などであった。《2. 成長し自信を得たい (3)》は、〈自信を得たい〉、〈自己PRを完璧にしたい〉などであった。《3. 就活の動機づけ (5)》は、〈キッカケになれば〉、〈基礎が身につけば〉、というもので就職活動をスタートしたいというものであった。

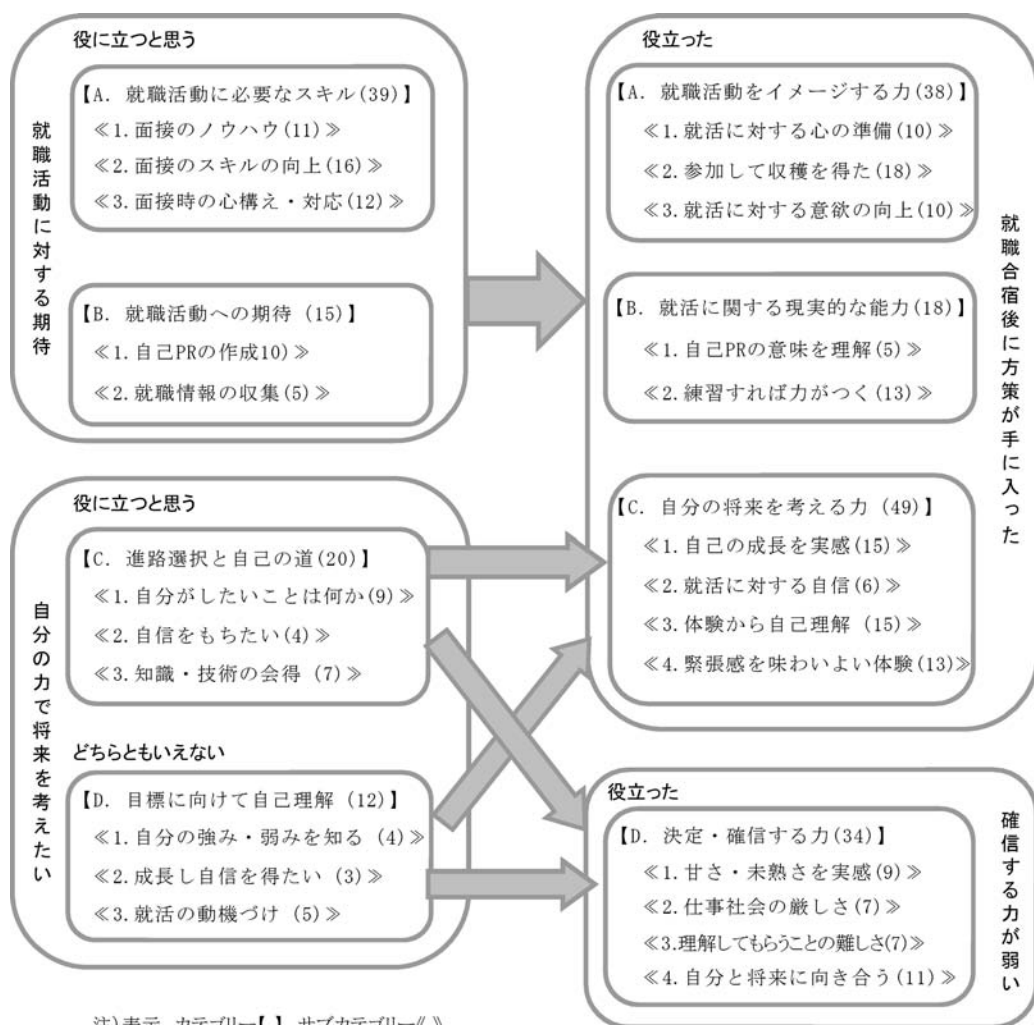


図3. 記述内容のカテゴリからみた就職合宿に対する意識の変化

(2) 事後の記述内容からみた意識

【A. 就職活動をイメージする力 (38)】では、≪1. 就活に対する心の準備 (10)≫は、〈練習が必要だ〉、〈本番に向けての心の準備ができた〉など準備の必要性に関する内容であった。次に≪3. 就活に対する意欲の向上 (10)≫は、〈やる気が出た〉、〈課題や方向性が見つかった〉、〈気合が入る〉、〈就活に対する意欲が出た〉など意欲の向上を示す内容であった。

【B. 就職に関する現実的な能力 (18)】では、≪1. 自己PRの意味を理解 (5)≫は、〈話すことは伝えること〉、〈自己PRや志望動機の密度をあげること〉と就職活動の必要性を再認識したというものであった。≪2. 練習すれば力がつく (13)≫は、〈面接の練習が必要〉、〈理解や行動力が必要〉、〈考えて行動すること〉など、合宿体験での実感が出ていた。

【C. 自分の将来を考える力 (49)】では、≪2. 就活に対する自信 (6)≫は、〈自信がつく〉、〈自信がもてた〉、〈自信がわいた〉、合宿前と比較して自信につながった内容であった。≪3. 体験から自己理解 (15)≫は、〈自己を見つめ直す〉、〈自分の力のなさを感じた〉、〈うまく発表できず悔しかった〉と自分をみつめ考え直す機会となったようであった。≪4. 緊張感を味わいよい体験 (13)≫は、〈緊張し頭が真っ白になった〉、〈面接での緊張感を体験〉、〈よい緊張のなかで練習ができた〉など緊張した姿が表現されていた。

【D. 決定する力や確信する力 (34)】では、≪1. 甘さ・未熟さを実感 (9)≫は、〈気持ちの甘さを実感〉、〈自分の能力の未熟さ〉など自己の力不足を実感した内容であった。≪3. 理解してもらうことの難しさ (7)≫は、〈人前で話すことの難しさ〉、〈伝えることの難しさ〉など難しさのキーワードが並んでいた。≪4. 自分と向き合う (11)≫は、〈反省点を活かす〉、〈やるべきことが発見できた〉、〈自分のダメなところが明確になった〉など自分の将来について向き合う必要があるとしていた。

4. 期待と評価、記述内容の年次比較

事前調査の「就職合宿に対する期待」では、「役に立つと思う」の割合が2009年度に比べ、2010年度の方が減っている。しかし、事後調査においては、昨年とほぼ同率の学生が「役に立った」と応えている。(図4、図5)

図6、図7は、2009年と2010年との記述内容の比較である。前年度は「モチベーションの向上」が3割あったが、今年度は1割強と少ない。年度の比較は単純にはできないが、昨年は「漠然としたイメージ」が22.3%で、今年度と同じ傾向のカテゴリーである「決定する力・確信する力」が25%と僅かに多くなっていた。今年度は「就活に関する現実的な能力」がカテゴリー化され、昨年度と比べ予測的な言葉より、現実的な言葉が増加していた。

図3をもとに事前と事後の記述内容を比較してみると、事前では、「就職活動への期待」のカテゴリーAとBの大枠は54 (62.8%) で、「自分の力で将来を考えたい」のカテゴリーCとDの大枠は32 (37.2%) であった。事後では、「就職合宿後の方策が手に入った」のカテゴリーAとBとCの大枠は105 (75.5%) で、「確信する力が弱い」のカテゴリーDは34 (24.5%) であった。

事前の「就職活動への期待」と比較すると「就職合宿後の方策が手に入った」が12.7%多くなっていた。

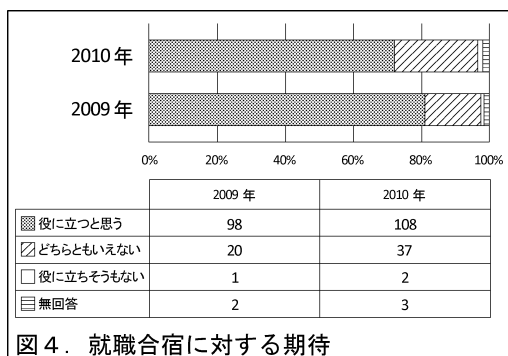


図4. 就職合宿に対する期待

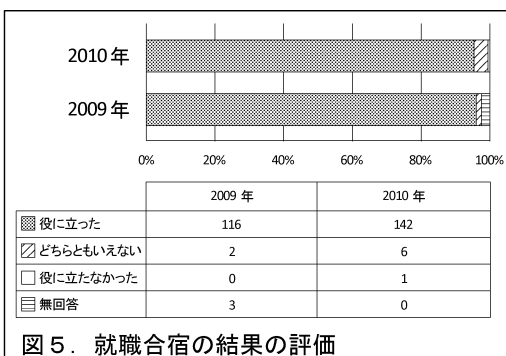


図5. 就職合宿の結果の評価

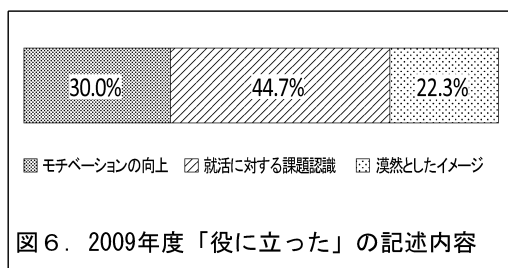


図6. 2009年度「役に立った」の記述内容

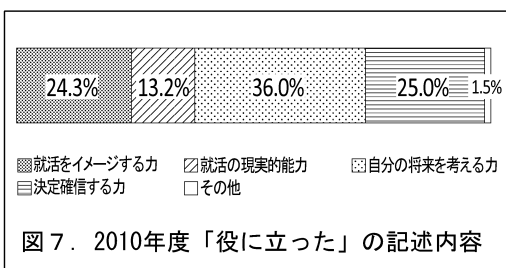


図7. 2010年度「役に立った」の記述内容

IV. 考察

1. “職業選択における自己効力”から就職合宿の効果

浦上はTaylor&BetzのCareer Decision Making Self-Efficacyの追試的検討を行う中で進路選択の自己効力と職業不決断は相反した関係にあることを明らかにした^[11]。他の浦上の研究^[12]ともあわせ、進路選択に対する自己効力の高いものは積極的な就職活動を行うといえる。本調査において、就職合宿の事前、事後に行った進路選択に対する自己効力の得点が有意に高く変化している。これは、単に進路選択に対する自己効力が高まったというだけでなく、就職合宿が学生に積極的な就職活動を促す効果があったといえるのではないかと考えられる。

因子に関しては、本調査では“就職活動をイメージする力”“就職に関する現実的な能力”“自分の将来を考える力”“決定する力や確信する力”の4因子が確認された。因子別比較で最も大きく変化したのは第2因子の“就職に関する現実的な能力”である。これは今回のプログラムが模擬面接に力を入れたこと、また、評価システムを導入し、学生が自分の実力（実力の変化を含む）を認識できたことが要因であると考えられる。最も変化が低かった因子（H学部においては有意な変化がみられなかった）は第4因子の“決定する力や確信する力”である。この因子の質問項目をみると現代学生に特有な全体的な線の細さを感じられる。これは事後調査の自己効力低得点（表1）の項目からも推察できる。設問4，18は社会情勢等の影響と考えられるが、「2. 自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること」「3. 5年先の目標を設定し、それにし

たがって計画を立てること」「14. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業に絞り込むこと」に関しては全体に比べて事後も得点が低い。つまり、自主的に動いて情報を得、それを確信したら次の1歩を踏み出すということができない。本学に一定数いる、前に進めないタイプの学生の姿が浮かび上がってくる。就職合宿以降も活動を開始していない学生群の特徴である。

2. 学生の意識からみた就職合宿の期待と効果

就職合宿で学生が事前に期待したものは、就職活動に必要なスキルであり、約半数の者が何らかの成果を手にすることができたと思われる。学生は事前の説明から「面接のスキル上達」や「自己PRの作成」というような当面の就職活動に対する現実的で具体的なスキルを求めている。これらの学生の多くは事後調査においては、「就職合宿後に方策が手に入った」としている。

前後比較では、「どちらともいえない」を選択した者が事前で1割以上いたが、事後は極わずかである。記述内容では、自分が体験してきたことを振り返り、自分の長所・強みや自分自身のもろさを知りたい、就職活動の基礎が身につけばいいと思うなど、迷いつつ自分の目標に向けて方向付けをしていることがうかがえる。

加えて事前では、「自分探し」の表現が多くみられ、自分の力で将来を考えたいとしている学生が約4割いたことである。このなかで彼らは、自分がどのような職業があっているのか、自分が何の仕事をしたのか見つけたいというように、大学3年生になり進路を選択する必要性に迫られ、自己の進路についての問いを投げかけ支援を求めている。

岩橋は、卒業延期をしている学生が、もう1年卒業を延期したいと申し出た事例を紹介している。学生は学問も中途半端であるし、自分がどのような職についたらよいか分からない、そもそも自分が何者なのか分からない、真っ暗で前に進んで行けないという。まずは、遠い先ばかり見ていないで、とりあえず自転車のライトが照らせるくらい先を見て進んではどうかと対応している^[13]。この学生の根底には「自分探し」での強い自信喪失があり、そこから抜け出せないのである。まさに本学においてもよく似た傾向の学生がいて、その対応に戸惑いを覚えることがある。そのため教員は、個々の学生をよく把握し彼らと真剣に向き合う必要がある。

事後の意識では、「合宿後に方策が手に入った」の中で、【A. 就職活動をイメージする力】と【C. 自分の将来を考える力】が6割以上を占めている。これは合宿体験自体がプラスに働き、本人自身も自覚ができたものと捉えている。記述内容でも、<自分は全然ダメでダメな自分に気付けた>、<始めは、とても緊張してうまく話すことができず、やりたくないと思ったが、2回・3回と繰り返すうちに、話す自信ができてきた>と、合宿での状況がみてとれる表現がある。このようにネガティブ表現からポジティブ表現に変化し、自分の将来を考え職業選択に対するイメージを少しずつ変化させ、行動しなければ進めないという心の準備ができたものと推測される。

しかし、大半の学生は、合宿が役立ったとしているが、目標に向かって行動しようとする意欲の向上を示す内容は、昨年と比較すると今年の方が少ない。彼らは、就職活動の必要性を認知していても、社会状況が悪いことが加味されてか、自分の思いや願いとの落差があるようで意欲的

な言葉が出ないのではないかと推測される。

また、「確信する力が弱い」とした項目が2.5割以上である。この中には就職活動をする前に、働くことの意識が低く弱い学生も存在する。彼らは自分の甘さを実感したとか、未熟さを思い知らされたなどと記述しているが、自分の知識や能力のなさを率直に語り、それを克服したいという思いも含まれており、自分と向きあう時間がとれたことが合宿の収穫であったといえよう。

今後は、合宿に参加していない学生や意識の低い者への対応をどうするかである。それには合宿のように集団を対象とする指導とともに、学生一人ひとりの価値観や志向性に即した個別対応を粘り強く続けていくという支援が肝要であろう。

3. 前年度の修正点をもとに改善された本年度就職合宿

(1) 前回の結果がどのように生かされたか

2009年度は就職合宿が学生の就職活動のきっかけになるようにという目標があり、この点においてはその役割を果たしたといえる。しかし、多くの学生が合宿後も継続して就職活動を展開できたわけではない。2009年度は就職合宿の後に3回のフォローアップガイダンスを学内で行ったが(資料1)、参加者は回を追うごとに少なくなってしまった。問題点としては、就職合宿で高まった興味関心を持続させることができなかつたことと、合宿がスタートでは遅いのではないかとということがある。これは現在の就活の早期化傾向に乗り遅れることだけを問題にしているのではない。

安達(2001b)は日本の高等教育機関において、授業場面で修得する学問と職業とのつながりのなさを指摘している^[14]。職業と勉強を結びつけて考える機会が与えられなかつた学生が3年生の後期になってからはじめて職業について考え始める。それでは、自分のやりたいことを発見したときには、意志決定をしなればいけない時期になっている^[4]。単に就職活動にとどまらず、学生一人ひとりの職業観の形成やそのプロセスに対しては考慮しなければならない問題である。

2010年度就職合宿では就職活動準備の仕上げになるよう、3回の事前学習とその後の合宿が計画された(資料2)。2010年度就職合宿の目的は“事前研修で学んだ内容の総仕上げ。徹底した模擬面接を行い、面接そのものになれながら、就職活動への「危機感」と「自信」を醸成する”であった。事前研修から合宿までの流れを計算したプログラムが2010年度の特徴である。就職合宿が2009年度に比べ、記述内容で具体性が増した(図6,7)のは、合宿前に3回の事前学習が実施されていたからであり、できることの予測ができてしまい合宿の期待値がやや低いことも(図4)そこに起因すると考えられる。

これらのプログラムの対比は就職合宿の事前、事後の資料からだけではなく、学生の就職活動や内定獲得の結果に反映されることが重要であるが、時期的に2010年度の結果が未定なため、次の課題検討に含める。

(2) 本研究からみえてきた就業意識形成のプロセス

因子分析や記述内容の分析からいくつかのキーワードを見出すことができた。それらをもとに、入学前から在学4年間の間に、どのようなプログラムを提供していけばよいのかについて、下記の図8のように検討を行った。

本研究からまとめると、1年次では、入学時の目標を確認し継続できるような学習をする。そして学生には常に自己責任があることを認識させ、自己と向き合う姿勢をもたせることである。2年次は、思いきりエンジョイすることと合わせて、理想と現実との違いを認識させる。それには志望動機が書けないとか自己PRができないなどに対応し、体験学習を積極的に行い、就業力不足を実感させ補うことであろう。

3年次には進路を選択する力がやや弱いことから幅広く情報収集し、専門分野の学習を進める。そして学生が、正課内外の活動に自信をもって臨めるよう支援する。また、彼らは現実的な力は十分にあるので、課外活動やアルバイトなどを活かし社会人としての態度を身につけることである。次に3年次後半から4年次は、専門分野の学習を深めると共に就職活動で行動力・実践力を発揮させる。そして彼らが、自分で進路を決定できるよう各種の事業に積極的に導くことが必要であろう。

以上から本研究でみえてきたことは、彼ら本人の能力を伸ばしきれていないことと合わせて事業のスタート時期が遅くなっていることも起因していると思われる。そのため、彼らの就業に対する自己効力を高めていくために、今までよりも少し計画を早め、初年次から段階的に就業意識形成のプログラムを推進していく必要があると考える。

学年	本研究で見えたもの	就業意識形成のためのプログラム
4年次	行動力・実践力 進路を決定する力	就職活動本番で行動力・実践力を発揮する 自分で進路を選択し、職業を決定する
3年次 就職 合宿	志望動機が書けない 自信をもちたい 社会性、マナー不足 参加者が6.2割程度	前期に専門分野の学習をして、就職活動に対する心の準備をする 正課外の活動と同じように自信をもって行動できるようにする 課外活動やアルバイト等を振り返り、社会人としての態度を養う 後期は合宿に参加し、就職に対する現実的な力をつける
2年次	学習不足を実感 自己PRができない 考える力が弱い 体験から自己理解	専門分野が選択できるように学習を継続する プレゼンテーションなど自己表現をする力をつける 社会で仕事をしていくために問題解決法について訓練する 目標をもち続け、自己の将来を考えると同時に自己を見つめ直す
1年次	自己探求 基礎学力不足 自分に自信がもてない	大学入学時の目標を確認し継続できるような学習をする 考える力を養う。自己責任であることを認識する。 学習習慣をつけるために振り返り学習を積み重ねる
入学前	高校との違い、学習の仕方 入学時の目標	

図8. 就業意識形成のプロセス

V. おわりに

就職合宿が学生の進路選択の自己効力を上げ、学生に積極的な就職活動を促す効果があったことは明らかである。学生はこの合宿で“就職活動をイメージする力”“就職に関する現実的な能力”“自分の将来を考える力”“決定する力や確信する力”が上がったと評価している。

ただ、自己効力の因子別変化の比較、記述分析からも明らかなように一定数、前に進めない学生がいる。将来について、自分自身で決定し、確信し、そして前に1歩を踏み出すことができない。これについて労働政策研究では「自由応募という形式が、大学生にとっては大きな障害になっているという指摘がある。現実的な体験が不足している学生にとって、現実とのすりあわせは困難な課題である」^[15]と分析しており、川瀬らは将来の職業について真剣に考えたことのない学生は業種や職種の絞り込みが困難で、様々な情報に圧倒されて自分は何がやりたいのか分からなくなると述べている^[4]。単に多くの情報を学生に提供すればよいというものではない。学生、あるいは学生たちが今もっている確信に何が加われば自信になり行動につながっていくかを考えなければならない。

また、積極的に活動する学生であっても、多くの情報だけを与え危機感をあおれば、やみくもに動いた結果、失敗の積み上げになり、無力感の追認ばかりをすることになる。富安^[16]は、進路決定に際しては、過去を振り返り、現在を見つめ、時間的展望をどれだけでもてるかが、有効な進路決定の重要な規定因となるであろうと述べている。やはり進路を決定するということは、単なる“就活”ではなく、個々の学生の仕事観の成長を大学4年間の教育の中にどの時期からどのような形で盛り込んでいけるかが重要である。具体的には、学生の現状を知るための個別で双方向の対話ときめ細かな段階を踏まえたプログラム、これを大学入学の早い時点で始め、時間をかけて前に進めていくことが必要であろう。

本学では就業力育成のプログラムが動き出した。まだ、完成されたものではないが、どのような形で前述の仕事観の成長に寄与できるかが期待されている。本研究は1大学の試行であるが、一つの事例であることは確かであり、進路選択の自己効力を育成すること、すなわち大学生の就業に対する意識の構築を支援するための方法論に繋がればと願っている。

最後に、調査にご協力いただいた本学学生と就職課の方々に感謝いたします。

引用文献

- [1] 日本総合研究所 調査部 関西経済研究センター <http://www.jri.co.jp/> 2009年.
- [2] 厚生労働省 報道発表 <http://www.mhlw.go.jp> 2011年.
- [3] 『平成21年度版厚生労働白書』厚生労働省、2011年.
- [4] 川瀬隆千・辻 利則・竹野 茂・田中宏明「本学キャリアプログラムが学生の自己効力感に及ぼす効果」宮崎大学人文学部紀要、第13巻第1号、2006年、pp. 57-74.
- [5] 菊池章夫『思いやりを科学する』川島書店、1988年.
- [6] Bandura, A Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 1997年, pp.191-2151.

- [7] 祐宗省三『社会学習理論の新展開』金子書房、1985年、pp. 103-136.
- [8] 玉田和恵「自己効力感と入学動機・学業態度・就職活動との関連」東京経営短期大学紀要、第6巻、1998年、pp. 95-109.
- [9] 浦上昌則「女子短大生の職業選択過程についての研究」教育心理学研究、第44巻第2号、1996年、pp. 195-203.
- [10] 浦上昌則「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」名古屋大学教育学部紀要 教育心理学、42、1995年、pp. 115-126.
- [11] 浦上昌則「女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor&Betz(1983)の追試的検討—」進路指導研究、16、1995年、pp. 40-45.
- [12] 浦上昌則「女子学生の学校から職場への移行期に関する研究—進路選択に対する自己効力—の影響—」青年心理学研究、6、1994年、pp. 40-49.
- [13] 岩橋文吉『人はなぜ勉強するのか千秋の人と吉田松陰』モラロジー研究所、2007年、pp. 44-45.
- [14] 安達智子「進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討—」心理学研究、第72巻、2001年、pp. 10-18.
- [15] 労働政策研究・研修機構「移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査」、労働政策研究報告書、2004年、p. 6.
- [16] 富安浩樹 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究、第8巻第1号、1997年、pp. 15-25.

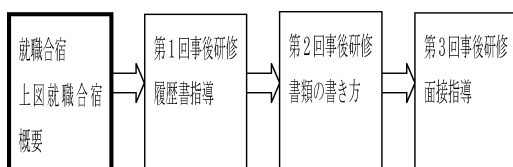
受理日 平成23年3月30日

資料 1

2009年度 就職合宿概要

(H学部)		(R学部)	
第1日		第1日	
13:00	講義 ・就職を取り巻く環境 ・将来像 学生生活 ・就職基礎知識 ・面接について	13:00	講義 ・就職を取り巻く環境 ・将来像 学生生活 ・就職基礎知識 ・面接について
16:40	ワーク ・模擬面接	16:30	ワーク ・第1回模擬面接 ・第2回模擬面接
18:00	夕食	18:25	夕食
19:10	ワーク ・代表者の選出	19:30	ワーク ・代表者の選出
19:40	自習	19:40	自習
2日目		2日目	
9:00	朝食	9:00	朝食
9:30	ワーク ・模擬面接、判別対抗	9:30	ワーク ・模擬面接、判別対抗
10:15	振り返り	10:15	振り返り

就職合宿、事前事後学習の流れ

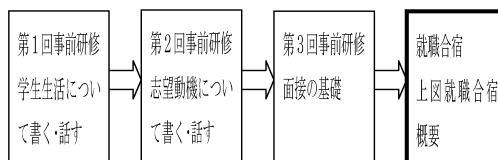


資料 2

2010年度 就職合宿概要

(H学部)		(R学部)	
第1日		第1日	
10:30	講義 ・「働くということ」	10:30	ワーク ・模擬面接準備
11:45	ワーク ・適性検査 ・グループディスカッション	ビデオ撮影と振り返り	
13:20	昼食	13:00	昼食
14:20	・第1回模擬面接-1 ・第1回模擬面接-2 ・第1回模擬面接-3	14:00	・第1回模擬面接-1 ・第1回模擬面接-2 ・第1回模擬面接-3
17:40	ワーク ・代表者の選出	17:40	ワーク ・結果発表 講評 ・代表者の選出
18:40	夕食	18:40	夕食
19:40	自習	19:40	模擬面接の映像視聴
2日目		2日目	
8:30	朝食	8:30	朝食
9:00	ワーク ・面接準備	9:00	ワーク ・面接準備
9:30	ワーク ・第2回模擬面接 班対抗	9:30	ワーク ・第2回模擬面接 班対抗
		11:15	講義 ・企業人からの講評

就職合宿、事前事後学習の流れ



2010年度 就職合宿事前アンケート

アンケート実施で、皆さんの就職に対する思いを知り、支援をより改善したいと思っています。ご協力をお願いします。

所属学部学科に○をつけてください。

経営学部

人間学部人間健康学科

1. この就職合宿は自分の役に立つと思いますか。ひとつを選びチェックしてください。例

役に立つと思う

どちらともいえない

役に立ちそうもない

2. あなたがこの就職合宿に期待しているものがあれば()に記入してください。

3. 今のあなたの状態を評価し、下の番号に丸をつけてください。

4	3	2	1
非常に自信がある	やや自信がある	やや自信がない	全く自信がない

	4	3	2	1
1. 自分の能力を正確に評価すること	4	3	2	1
2. 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること。	4	3	2	1
3. 5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること。	4	3	2	1
4. もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること。	4	3	2	1
5. 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること。	4	3	2	1
6. 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと。	4	3	2	1
7. 将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること。	4	3	2	1
8. 本当に好きな仕事に進むために、両親と話し合いをすること。	4	3	2	1
9. 自分の理想の仕事思い浮かべること	4	3	2	1
10. 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。	4	3	2	1
11. 欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること。	4	3	2	1
12. 自分の才能を、最も生かせると思う職業分野を決めること。	4	3	2	1
13. 自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと。	4	3	2	1
14. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業に絞り込むこと。	4	3	2	1
15. 自分の将来の目標と、アルバイトなどでの経験を関連させて考えること。	4	3	2	1
16. 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力に合っていないと感じるものであれば断ること。	4	3	2	1
17. いくつかの職業に、興味を持っていること。	4	3	2	1
18. 今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと。	4	3	2	1
19. 自分の将来設計にあった職業を探すこと。	4	3	2	1
20. 就職時の面接でうまく対処すること。	4	3	2	1
21. 学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること。	4	3	2	1
22. 将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること。	4	3	2	1
23. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。	4	3	2	1
24. 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと。	4	3	2	1
25. 望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと。	4	3	2	1

事後質問用紙は、1. が以下のように変化し、2. 3. は番号がずれるが同じ質問。

1. この就職合宿は自分の役に立ったと思いますか。ひとつを選びチェックしてください。例

役に立った

どちらともいえない

役に立たなかった

2. 就職合宿開始時に期待していたものが得られましたか。

得られた

どちらともいえない

得られなかった